

タイトル	環北太平洋の後期完新世における海洋航海の発展と複雑化した狩猟採集社会との関係
著者	手塚, 薫; TEZUKA, Kaoru
引用	年報新人文(21): 275(33)-252(56)
発行日	2024-12-25

環北太平洋の後期完新世における海洋航海の発展と複雑化した狩猟採集社会との関係

手塚 薫

1. 海洋航海の再検討

本論文では環北太平洋に位置する3つの複雑化した海洋狩猟民を取り上げ、その異同を探ることを試みる。それらの海洋狩猟民は大陸と島嶼間の往復が必要であり、船に関する卓越した技術を有していることが共通点である。

2023年11月3日から5日までの期間、国立民族学博物館を会場として国立民族学博物館共同研究会が国際シンポジウム形式で開催された。この研究会は岸上伸啓氏が研究代表者を務め、研究課題は「環北太平洋地域の先住民社会の変化、現状、未来に関する学際的比較研究—人類史的視点から—」である。期間中に国内外の研究者が集い、それぞれの研究発表の後で活発な議論が交わされた。筆者は11月3日のセッション2で“The Interaction of Complex Hunter-Gatherer’s Societies with the Development of Seafaring Technology in the Late Holocene in the North Pacific Rim”と題した口頭発表を行ったが、本論文は、

そのときの内容に多くを負っている。Complex Hunter-Gatherer を本論文では、複雑化した狩猟採集民と翻訳している。北米北西海岸地方の首長制社会にみられるようなポトラッチなどの慣習を有する階層化した社会は、これまでの狩猟採集民の枠組みから逸脱しており、農業による食料生産をとまわずに定住性の高い暮らしを実現していた。

おおよそ 3000 年前以降の後期完新世には、北米北西海岸以外にも世界の各地で類似した事例が見いだされるようになってきている。そうした複雑化した狩猟採集民の成立の背景に、これまであまり注目されてこなかった発達した海洋技術、とりわけ船による経済活動の重要性があることを明らかにしようとするものである。

近年、研究者の間で、このような特徴を seafaring 「海洋航海」という用語を用いて説明しようとする傾向が顕著になってきている。そこで、この「海洋航海」のフレームワークを用いながら、環北太平洋諸地域間の異同を探ってみることにする。しかし、個々の地域の詳細な文化の変化を検討することまでは、筆者の力量を超えていることもあって、意図していない。

また、関らが明らかにしているように、約 3000 年前のアンデス文明の権力形成に、貴重な荷役用の動物として飼育されたリヤマが大きな役割を果たしたことが議論されている（関編 2017）。これは陸地の事例であるが、海上でも交通手段の進化が社会の複雑化に同様のインパクトを与えていることも追求されてしかるべきであろう。島嶼環境へ進出するなど、優れた海洋技術を駆使した複雑化した狩猟採集民として以下の 3 つを比較対象とする。

アラスカ先住民の代表としてアラスカ南西部のコディアック島 (Kodiak) のパシフィック・エスキモーを、北米北西海岸の先住民の代表としてハイダ・グワイ諸島 (Haida Gwaii) のハイダ族を、筆者も現地調査参加した北東アジア先住民の代表として千島列島 (Kuril Islands) のアイヌを考察する (図 1)。千

島列島、アラスカ南西部コディアック島、ハイダ・グワイ諸島の海上生活、とりわけ船を比較の中心に据える。なお、筆者はアイヌ文化研究を専門としているために、3地域の中でアイヌの船の構造と歴史について重点的にとりあげることをあらかじめお断りしておく。

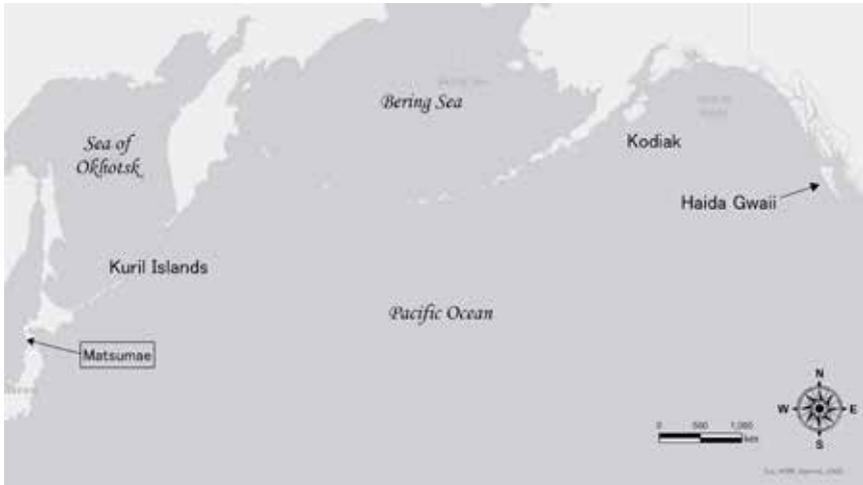


図1 北太平洋沿岸地域と本論文で扱う3島嶼の位置

2. サケが複雑化した社会の基盤なのか

縄文時代の東高西低の状況を示す遺跡数の差、すなわち人口の格差を説明するものとして山内が提唱したいわゆる「サケ・マス論」がある（山内 1964）。これは秋に大量に遡上するサケ・マス資源と同じ時期に結実するドングリ等の堅果類を集中的に採捕し、貯蔵することで集落を形成し、安定的な定住生活を営み、人口規模を大きくすることを可能にしたとするものである。また、同じ論考のなかで、太平洋を挟んだ東と西の対比をこのように記す。「北米の

Indian には、サケの遡上する地帯で、これをとって保存食料とする処もある。Salmon Area といわれる。南はカリフォルニアから北はアラスカに至る。これに対応するアジアの東岸もこれに似ていて、各地の住民はサケを主食とするといってよい。その南端が北海道アイヌであり、日本の東北部である。カリフォルニア Indian は北部ではサケとドングリの両者を保存食料としている。南半ではドングリが主食である。Acorn Area といわれている。これと似て縄紋式文化圏の西南半は木の実を主食とし、東北半は木の実とサケの二本建になっていたと考えられる」。民族誌と考古学資料に依拠しながら、カリフォルニア・インディアンとアイヌから縄文社会までの豊かな食料資源に恵まれた安定的な定住社会の姿を比較して描写した。この「サケ・マス論」は実際に遺跡からサケ・マスの魚骨が出土しないことが多く、国内では大きな論争となった。近年、いるま野市前田耕地遺跡、石狩紅葉山 49 号遺跡などで、徐々に考古学的な裏付け資料も確認されつつあるが、貝塚からの出土例が少ないなどの問題点もはらんでいる。

2012 年にコロンビとブルックスが編者となり、サンタフェ高等調査研究所が主催したセミナーの成果本が刊行された (Colombi and Brooks eds. 2012)。サケは先住民族の生存と文化的アイデンティティの源泉となるキーストーンであり、先住民とサケが、歴史的にみても、特別に深く結びついていることを再認識させてくれる優れた研究である。しかし、サケだけが複雑化した社会を支えるのではない。モンクスは、サケを強調しすぎるあまり北西海岸の先住民の経済に重要であった他の資源を見落とすことを、サーモン病 (Salmonopia) と批判した (Monks 1987)。

サケが入手できるだけ、あるいはその捕獲が集中的に実行されるだけで、定住的な生活や複雑化した社会が出現するわけではない。食料が欠乏する季節に備え、捕獲貯蔵できる技術と保管場所の確保が重要である。効率的な捕獲と貯

蔵の技術が、複雑化した社会の進展には不可欠になるからである。しかし、サケが遡上したとしても、複雑化した狩猟採集民に特徴的な高度な定住性が保証されるわけではない。サケと生活の安定度との関係は、季節的に遡上するサケを、どの程度恒常的なエネルギーに変換できるかにかかっている。

3. 海洋航海技術にフォーカスする研究史

この方面の研究史としてまず取り上げるべきなのは、渡辺による環北太平洋文化の集中的な通文化比較研究の成果であり、その特徴が紹介されている（岸上 2015）。渡辺は環北太平洋の東と西の文化の共通点を体系的に分類した（渡辺 1988）。この論文は、同地域における船の重要性をも比較検討し、遠距離航海による異民族間交易にも言及した初期の業績として、アーノルドの海洋狩猟民における海洋技術の革新を取り扱った論文と並び、高く評価できる（Arnold 1995）。しかし残念ながら、渡辺のこの研究の続編は提出されず未完に終わっている。船は食生活関連要素の中で論じられ、社会生活や戦争とのかかわりや、遠距離航海による異民族間交易についてはごく簡単に扱われているだけである。とはいえ、環北太平洋諸文化の共通性の背後には大型の船が存在し、その存在がこれらの特徴を強化する働きを果たしていることを示唆している点で画期的な研究といえよう。

また、渡辺の 1992 年の論文では北太平洋沿岸の階層化した狩猟採集民社会に普遍的にみられる 4 つの共通点を取り上げている（渡辺 1992）。それらは、生業分化（狩猟の特殊化）と階層化、貧富差（財宝の蓄積）、行動域と知識の階層化、礼儀・作法と言葉の階層化から構成される（渡辺 1992）（図 2）。

まず、狩猟採集民社会に普遍的にみられる階層化は基本的に生業分化にもとづいており、大型獣の狩猟に特化した生業パターンを持つグループ（大型獣狩



図2 北太平洋沿岸狩猟採集民の社会的階層化にみられる共通性

狩者)と非専門者のグループ(非狩猟者)に区分される。前者は富者(指導者層)に相当し、宝物類(威信財)は、エリート階層の身分の指標であったばかりでなく、結婚関係の支払い(結納・持参金)と紛争(戦争・殺人)解決の賠償の手段として重要な社会的・政治的機能を果たしたと述べている。

行動域・知識の階層化現象については、大型獣狩猟者の行動域が非狩猟者の行動域を凌駕し、彼らが技術的・儀礼的に複雑で高度な知識を保有して地域社会の知識階級を形成した。富者(上層、指導者層、貴族)と平民の知識の差は、両者が従事する生業の差による行動域の差に一致し、行動域の格差は知識・経験の格差をともなっていると主張している。平民は旅行嫌いでも考えも偏狭なのに対し、高位の人は通文化的相互作用のスペシャリストであるという。そのことから、当然の帰結として、船は行動域やそれを運用する知識、入手する資源の多寡に直接関与していることが窺い知れるのである。

礼儀・作法と言葉の階層化については、政治的・儀礼的特権とそれに起因す

る経済的余剰を支配する者は、他の人々とは異なる、複雑で洗練された礼儀作法と言葉遣いを維持していたとする。

一方、渡辺のこの2つの研究成果については、歴史的な変化を把握する枠組み（時間軸）が提示されず、もっぱら過去の伝統文化に焦点をあてており、現代の先住民諸文化と彼らの将来に触れていないとの批判がある（岸上 2022）。この問題については本稿の終盤で取り上げる。

その後も個々の地域、たとえば、千島列島のアイヌ文化期の船による長距離交易を扱った研究も公表されたが、環北太平洋の他地域との比較はまだ未着手であった（Tezuka 1998）。また、世界中の海洋航海の発展が、移住手段における技術的な進歩だけではなく、移住や地域間交易の拡大を通じ、社会や経済の変革に結びついていることを証明した画期的な研究成果が1冊の図書として刊行された（Anderson, Barrett, and Boyle eds. 2010）。この本の中では、本稿とも関係する北米北西海岸の3つの地域の複雑化した狩猟採集民の比較検討が行われており、北米の海洋に適応した社会における海洋航海の重要性が論じられている（Fitzhugh and Kennett 2010）ものの、環北太平洋の西側の地域は含まれていない。

コディアックとハイダ・グワイでは、身分格差の出現は重要な捕鯨活動の発展と一致しているとの見解がある（Acheson 2005; Fitzhugh 2003; Sampson 2023）。千島アイヌの場合も、社会階層の上部が生業・情報・交易を管理しており、先住民社会階層内の身分・立場によって、外部社会からの移入品にアクセスする度合いは異なっていることが知られている（手塚 2011）。

2024年にはファウヴェルらによるカリフォルニアと北海道の海洋技術と海洋アイデンティティに関する論文が発表された（Fauvelle, Sasaki and Jordan 2024）。アイヌの縄綴船と同種の準構造船の特徴を持つチュマシュ（Chumash）の海洋航海船トモル（tomol）の2つを比較している。結論部分では、進化し

た船の出現と社会の階層化の相関関係を、技術革新、交易の拡大、人口増加、アイデンティティの確立という4つの現象と関連させて弁証法的に論じている。

4. 島嶼への適応パターン

大陸と島嶼の関係については、生物地理学理論や社会生態システムの研究の蓄積から一般に以下のような各段階からなるモデルを提示できる (Holling and Gunderson 2002)。

- ①島は資源の連続性のある大陸と違い、高度な航海技術が要求され、低い人口支持力に加え、大陸の源流地で培った知識が通用しないなど、その環境に適応するのは困難である。そこで本土（出発地）との経済的・社会的交流が維持される必要がある。本土との間を行き来する一定の手段は存在していた。
- ②島の環境に適応し、内陸だけでなく海洋の資源をうまく活用することが可能になる。島での適応がうまくいけば人口が増加する。環境収容力の高い島では、本土との交流は減少し、航海手段は周囲の資源開発、近隣地への移動が中心となる。
- ③生息地が飽和状態になり、人口が拡大し、重要な資源をめぐる競合は激化し、同盟関係、交易、戦争を助長する。一部の人々が、他人を排除しつつ重要な資源の排他的な支配と外来品へのアクセスから利益を得るような象徴経済・威信経済の段階に移行する。複雑な狩猟採集社会への移行（階層性）が特徴であり、特定の身分・地位に富が集中する。この段階では本土などの他地域との交流が鍵となる。
- ④効率的な資源・資本の集約が行われ、資源利用が安定しているものの、新規性や柔軟性は失われ、そこに外部からの何らかの攪乱や衝撃によって崩壊が

生じ、諸資源やエネルギーが消費され、古い適応システムは崩壊し、新たなシステムが再構成される。

つまり、島嶼環境へ進出した当初は、島外の資源を持ち込んで利用するが、その後、新しい環境に適応するなどして「自給自足」の度合いが高まれば、島外よりも島内の資源への依存を深めることが予想される。③のような政治的な競争が発生する段階に移行すれば、以前よりも広範囲で長距離の交流が行われるなどして、再び島外の物資を用いる可能性が高まる。この形態は、種々の要因（環境変化、移住規模・頻度、島嶼サイズ、島と本土の距離、生業・造船技術）によっても影響を受ける。

5. 島嶼地域の拡散と適応

千島列島への人の移住は、現地調査の結果、おおむね以下のような段階をへて行われたと考えられている（手塚 2011）。続縄文文化期に中部千島列島までの一時的な進出がみられるものの、オホーツク文化期に入るまで千島列島全域に居住域を拡大することはできなかった。アイヌ文化に先行するオホーツク文化の船の利用に関して、大井は集中的な調査の結果、「それらの船はけっして長途の、少なくとも数日以上の、航海を想像せしめるものではなかった」と、総括している（大井 1976）。千島列島の多くの地域では、造船に適した木材利用は難しかったため、日常の生業活動での使用がメインであったと考えられる。

ハイダ・グワイ諸島では、後期更新世に最古の遺跡が形成されるが、およそ 12000 年前には本土と地続きになっていたことから、船による植民が行われたかどうかは判然としない。北米の西部沿岸では、全球的（ユースタティック）な海水準変動によって、中期完新世以前の移住の証拠は見られないことが多

い。北米北西海岸では、中期完新世以降にスギ林の自然拡大によって大型カヌーの建造に適した木材が供給されるようになると、海岸の広大な範囲における航海と社会的交流が増加したことが示唆されている（Ames and Maschner 1999）ものの、本格的な大型船の建造が始まるのは、後期完新世をまたなければならなかった。

コディアック島では、タンギナク・スプリング遺跡から得られた証拠から、7500年前に人々が列島に移住しており、大陸に住む集団との定期的な接触を維持していた（フィッツヒュー 2002, Fitzhugh 2003）。コディアック島やさらに北方地域では、流木の骨組みに海棲哺乳類の皮を張った大型の皮船が出現する。

6. 後期完新世における3地域の共通性

これら3地域の考古学的な成果に依拠すれば、初期の居住から数百年～数千年の期間、現地の資源に依存を深める自給自足の期間があったことを示唆している。また、それぞれの地域の長期の文化編年（表1）にもとづくと、共通した特徴が後期完新世に登場していることがわかる。それらは主に、人口増加、社会階層化（奴隷の存在）、狩猟・交易・戦争の集中（威信活動による地位向上の欲求）、専門化（生業活動の強化）と技術革新（大量の荷物を運び、長距離航行が可能な大型船の建造）であった（図3）。

中期完新世では、以上の特徴がすべて出そろっているわけではないことに注意を向けなければならない。北米北西海岸地方では、狩猟採集民における世襲的地位の不平等性といった特徴は、4000年前以降に生じ、それらは後の同地域の複雑化した狩猟採集民の形成へとつながっていくとされている（Prentiss 2011）。

表 1 3地域の完新世に関する文化編年

Ames and Maschner 1999, Fitzhugh and Kennett 2010, 手塚 2011 から作成

	文化期	およその暦年代	地質学年代
コディアック	後期コニアク	500-Contact	後期完新世
	前期コニアク	700-500BP	後期完新世
	後期カチェマク	2600-700BP	後期完新世
	前期カチェマク	3800-2600BP	中期完新世
ハイダグワイ	後期バシフィック	1800/1500-接触期	後期完新世
	中期バシフィック	3800-1800/1500BP	中期/後期完新世
	前期バシフィック	6400-3800BP	中期完新世
	アーケイック	12500-6400BP	前期完新世
千島列島	アイス	500-Contact	後期完新世
	オホーツク	1300-600BP	後期完新世
	続縄文	2500-1300BP	後期完新世
	後期/晩期縄文	5000-2500 BP	中期完新世
	早期/中期縄文	8000-5000 BP	早期/中期完新世

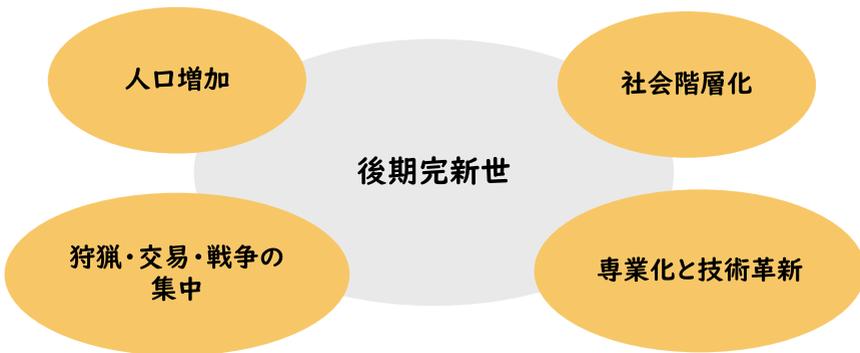


図3 後期完新世と3地域の共通点

大型の船の登場に関し、千島列島ではその証拠は、後期完新世のアイヌ文化期になるまでみつかっていない。オホーツク文化期には千島列島全域に遺跡が広がる一方で、カムチャツカ半島に遺跡の存在は確認されていない。千島列島では船製作に必要な大型木材の取得は困難であるが、15世紀からロシア人との接触の直前に相当する17世紀前半までアイヌ文化に関連する遺跡の分布は、カムチャツカ半島南部地方にまで広がるために、大型船制作にふさわしい木材が調達できたと考えられている（高瀬 2015, 2023）。

アイヌのいわゆる「縄綴船」は、イタオマチテ（itaomacip）とも呼ばれ、北海道本島でも使用されたが、千島列島で使用されたものは一般により大型で走破性も高い（図4）。その構造・技術と歴史には多くの先行研究があるので、構造、歴史、慣習を簡潔に紹介する。

船底に一本を削りぬいた丸木舟を置き、両舷および船首と船尾に複数の板を縄で綴じつけて積載容量を増やし、波除の機能を持たせることから準構造船の



図4 18世紀の千島アイヌに利用された大型縄綴船
（大塚和義編著・国立民族学博物館編 2001）

特徴を有する。また、葎でつくった帆と木製の櫂が使用されている。帆の利用について北米では、ヨーロッパ人との接触期以降に普及するとされるが、アイヌの場合は古くから用いられていることが確認されており、これが和人の製作技術の影響なのかどうかは不詳である。両舷に突起のついた櫂座(タカマチ)を設け、車櫂の基部に空いた穴に通して前後に動かし推進具とする。甲板は設置しない。1890年に北海道を旅したランドーは、アイヌのこうした船の長さについて記している。それによると全長3～4.6m、全幅0.9～1.1mと小型であり、ちょっとしたスコールでも転覆するような代物であったという(ランドー1985)。

一方、秦檜磨の『蝦夷島奇観』には大船図があり、「キイタツ、クナシリ邊の夷」が船を飾りつけ、松前藩主や箱館奉行に「お目見え」(ウイマム)する際に、「7尋半許」とあるので一尋を五尺とするか六尺とするかで異なるが、全長11.3m～13.6mの大型船が存在したことを記している。また、千島列島中部に位置するラショア島からアイヌ14人が1805年にロシア人の命によりエトロフ島の様子を探るために船で来航し、津軽藩士に捉えられ、シャナ会所に拘禁された事件があり、『休明光記』に記録されている。この際に乗船1艘が吟味され、「長六間半 深三尺餘」(『休明光記』)とあることから、全長約11.7m、深さが約90cm余りあり、14人の乗員が乗船できたことになる。

大船を建造する際に、10mを越すような舟敷以外にも大型の板の確保が欠かせない。近代のアイヌの物質文化の特徴として、鋸の存在は希薄であり、かつては鋸を多用したか、和人で板材を直接入手した可能性もある。18世紀にはこうした船は誰もが製作できるわけではなく、首長層が制作と使用を独占し、首長またはその妻が所有し、それを一定期間貸付け、漁獲物を賃料とする慣習もあった。また、旅に出た長老が長い航海から帰還すると、船上と陸地の双方で、人びとは槍と刀を振り上げ、叫びつつ地面を踏みしめながら行進す

るといふ儀礼を行つた。これは遠来の客人を迎え入れるための儀礼とされ、18世紀後期には和人とロシア人により千島列島でたびたび目撃されている（瀬川2013）。海上からの侵入者との戦闘を演劇化しており、その背景には船による襲撃の記憶が反映しているかもしれない。

歴史に関しては、札幌市 K30 遺跡からは9世紀の地層（擦文文化期）から舟敷舷側部片が出土し、最古の縄綴船の事例とされている（鈴木2003）。1520年から1620年代まで北海道の近世史で「城下交易」と呼称されるアイヌと和人が松前城下で活発な交易活動を展開する時期には、アイヌが千島海域から北海道南西端の松前城下まで片道約千キロを90日間かけて移動する長距離交易を実施していたことがイエズス会士の記録から知られている（チースリク1962）（図1）。民族誌や明治期に記録される小型の縄綴船とは全くことなる、積載容量と航海性能を高めるための大型縄綴船の存在が知られていた。航海の途中でボートを陸地に引き上げ、船体を解体して板材を乾かすなどのメンテナンスをおこなう必要があった。

以上のことから、北海道では縄綴船の出現は9世紀代に遡り、アイヌと和人の交易活動が進展する元和年間頃には、アイヌが大型の縄綴船に乗って自由に往来する時代があった。しかし、商場知行制に移行し、アイヌが蝦夷地内にその活動を限定されるようになると、次第に大型の縄綴船が使用される機会は減少するようになったと考えられる。

本土から遠く隔たった島々に住むハイダ族は、必然的に海と陸地を往来する民族であった。全長18.3メートルもある大型カヌーで交易船団を組み、ビクトリアまでの往復1600キロを航海した（Stewart 1984）（図5）。ハイダ族は、バンクーバーからコッパー・リバーに至る北米北西海岸の他のすべての民族と、彼らの巧みに作られたカヌーを取引した。クイーン・シャーロット諸島の巨大なレッドシーダーから積載量6～8トン、長さ60フィート以上のカヌーを製

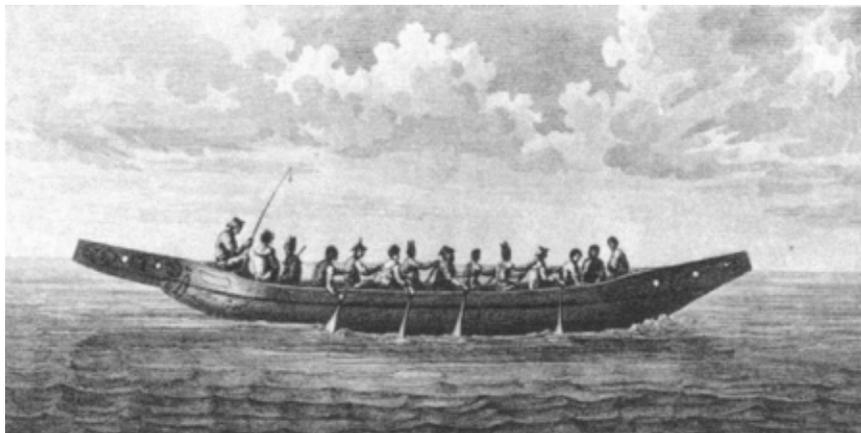


図5 ハイダ族の大型カヌー (Emmons 1991)

作することができた。取引の際、先住民の時間観念に従って、交渉に長い時間を費やすことが往々にしてあった。先住民の儀式、歌、踊り、富の披露は、通常、交易のプロセスの一環であったことを、欧州からやってきた航海者が記録している (Fisher 1996)。北西海岸の先住民は大型の戦争用カヌーを漕ぎ出し、奴隷を確保するために遠隔地の村々を襲うハイダ族の存在を知っており、その対策も講じていたという (Reid 2015)。

後期完新世の初期、約 2000 ～ 2500 年前から、コディアック島では政治的競争の証拠が増加する。地域的な社会的階層化の兆候が見られ、戦争で捕虜とされた奴隷も存在した。以前は使用されていなかった外来材料の使用が見られるようになる (Steffian and Saltonstall 2001)。クジラの捕獲や、局地的な防御施設の充実など、政治的な競合の証拠が増加した (Fitzhugh 2003)。

ダヴィドフによれば、アラスカ海域では、一度に数十人を運べる規模の大型ボートが作られ、これらの航海は片道 900km にも及んだ (Davydov 1976)。こうした皮舟はアングヤック (angyaq) (複数形は angyat) と呼ばれ (ロシア語

ではバイダラ baidara ともいう), 長距離の交易遠征や戦争, 村落間の移動に使われた大型のオープンボートである (図 6)。アングヤックは軽くて丈夫な木製のフレームを持ち, そのフレームは鯨のヒゲで結わえ付けられていた。このため柔軟性に富み, 荒波の中でも折損を防ぐことができた (Crowell, Steffian, and Pullar eds. 2001)。ステファンソンは, 皮船は, 縫い目を締めて腐敗を防ぐために, 数日ごとに乾燥させる必要があったという (Stefansson 1913)。陸地で野営する際にはこの船をひっくり返して小屋として使うことも一般的であった。

北アメリカの太平洋岸では, ボートの容量は後期完新世の後期に拡大し, 戦闘行為の激化にも関与している (Fitzhugh and Kennett 2010)。航海の安定性はともかく, ボートは国内生産だけでなく, 威信をかけた交流や戦争にも使われるようになった。ボートの大型化は, 生業経済から象徴経済・威信経済への移行にも密接に関与していることを示している。

これは, 3 地域の船の名称, 全長, 構造, 装飾塗装, 素材, 継ぎ目加工, 推進具, 出現期, 航続距離, 主要目的をまとめたものである (表 2)。考古学的証拠にもとづくならば, 北海道では縄綴船の出現はもっと早い。



図 6 アングヤックの模型 (Crowell, Steffian, and Pullar eds. 2001)

表2 3地域の船の比較

	コディアック	ハイダグワイ	千島列島
名称	Angyaq	Thlu-kah-ku-uke	Itaomacip
全長	12m	18m	14m
構造	木製枠、平底、皮革、二股船首	削舟、木製船尾、木製船首、 綴じ合わせた側板	削舟、綴じ合わせた側板
装飾塗装	可能性あり	有	有
素材	木枠、クジラ髭	レッドシーダー	カツラ、シナノキ
継ぎ目加工	アザラシ皮またはアシカ皮でできた防水カバー	炭とアザラシ油の混合物、トウヒまたはスギの根	苔、シナノキ繊維
推進具	櫂	櫂	車櫂/帆
出現期	1000BP	1900BP	500BP
航続距離	900km	1600km	1000km
主要目的	交易、移動、搬送	遠征、戦闘	交易、戦闘

Crowell, Steffian and Pullar eds. 2001, Emmons 1991, Fitzhugh 2003, Miller 2010, Stewart 1984, 大塚和義編著・国立民族学博物館編 2001, 小林 1988, チースリク 1962 などから作成

7. 複雑化した狩猟採集社会の歴史的展開過程

環北太平洋の諸民族の文化的共通性を生態人類学的視点と伝播論的視点を組み合わせて解明しようとした渡辺の先駆的な業績（渡辺 1988, 1992）に対して、歴史的な変化を把握する枠組み（時間軸）が提示されていないとの批判があることを先述した（岸上 2022）。この欠点を克服するためには、図7に示したように、具体的にいつの時期を指すか不明なことの多い「民族誌現在」の観点から脱却し、各文化要素間の相互作用を歴史的なプロセスとして理解する必要がある。各要素は同時に出現するわけではなく、それぞれが相互に影響しながら変化してきた流れを動的に捉えることができる。この図では時間は左から右に経過する。

大陸から島嶼部への移住のあとに、特定生息地内の資源を効率的・安定的に

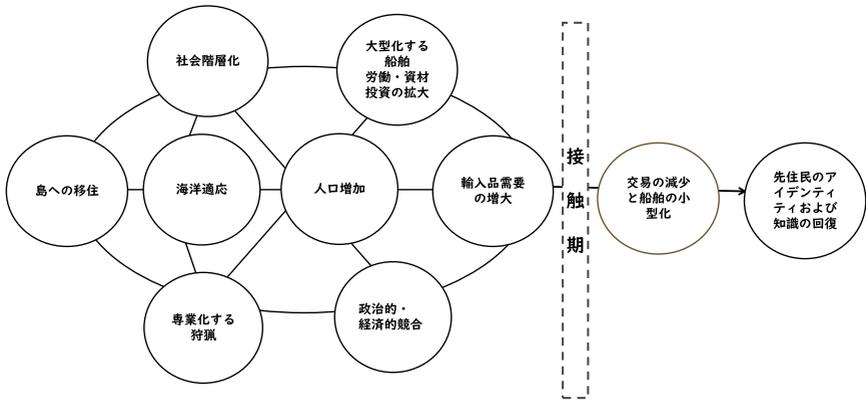


図7 複雑化した狩猟採集社会の歴史的展開過程

利用する手段を確立できれば、人口増加につながる。多くの場合、それらは安定した海洋適応による食料の獲得を意味している。

いずれの地域でも、海洋資源の効率的な開発により、定住化が進み、人口は増加し、余剰が蓄えられやすくなるという状況が生まれた。海水準が安定し (Fladmark 1989)、航海に適した環境が整ったことも大きい。また、素材が入手できる環境に居住域を拡げる試みも無視できない。外部社会から流入した珍しい移入品が、階層化した社会の発展を支えた側面もあるだろう。

交易価値の高い資源を生産するためには、特殊な技術と投資が必要であり、すべての人が狩猟活動に従事できるわけではない。大型の準構造船と皮舟は技術革新の結晶であり、小型のものから徐々に発展していった。建造には特殊な技術と原料が必要であり、労働や制作に多大なコストがかかった。環北太平洋において、こうした船の使用は、社会的・政治的な複雑さの増大と一致しており、技術的により複雑な船の設計は、造船のスポンサーとなる首長の威信を高めることにつながった。また、海を利用した狩猟・交易・戦争・儀礼が可能に

なったことで、社会階層化、安定した定住化、首長制社会の形成を促した。

狩猟が専門化するようになると、その結果として知識・儀礼が特殊化する。交易や略奪のための航海を支援できる富裕な首長層や、クジラ、海獣類、大型魚類など危険な獲物を外洋で狩猟できる首長層は、威信を高め、外来の物資をより多く入手するための長距離航海を企て、社会内部での序列に基づき、富の蓄積は次第に非対称の様相を呈しはじめる。政治的・経済的な競合は一段と高まり、より長距離を、より大量の交換品とより多くの戦士を載せて移動するために、さらなる技術革新が船の大型化を促進させる。交易は単に経済活動の側面からのみ説明されるべきではなく、精神文化ともかかわる種々の精巧な儀礼が付随する。したがって、接触期後しばらくたって人口が減少し、交易が衰退すると、そうした儀礼もまた消失することになる。

技術革新は外部からの略奪を誘発しやすくするなどの副作用もある。本格的な接触期を経て、長距離交易は衰退し、船体は小型化し、近海や河川での狩猟が中心になる。しかしながら現代は、海洋航海の記憶が文化復興や伝統的知識の継承に貢献している。

1875年の日露間で締結された樺太・千島交換条約によって、千島アイヌは残念ながら、千島列島内における北から南への移住を促され、海洋航海の伝統はいったん途絶えたかに見えた。しかし北海道では1980年代頃からこのアイヌの優れた民俗知を現代によみがえらせ、そこに込められた祖先たちの知恵のエッセンスを学び取り、そこからアイヌ民族のアイデンティティを再興するというプロジェクトがイタオマチヅを中心にして実施されてきた（大塚 1995）。これらの製作物は日本国内の博物館に納入されることも珍しくない。同様に今日のコディアック島でも、アングヤック民族プロジェクト（Angyaq Tribal Project）を通じ、伝統的な大型皮船を復元し、実際に航走する取り組みが行われ、若い世代を含む地域コミュニティの再生・復興の原動力となっている。いずれ

の地域でも伝統的な船や航海に関する知識の拡充が先住民のアイデンティティの基盤になっていることを確認できる。現代ではこうした船を再現し、実際に海上を走らせることにより、知識伝承や文化の復興への機運が高まっている。

(てづか かおる・北海学園大学人文学部教授)



図8 2002年に新ひだか町で復元された
イタオマチブ
(石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館
編 2022)



図9 コディアックのアキアックの若者が
2016年に復元したアングヤックを漕走
(パーク博物館で筆者撮影)

謝 辞

本稿の作成において、野口泰弥氏（国立民族学博物館）と査読者から建設的な助言を多数いただいた。末筆ながら感謝申し上げる。

本稿の執筆に当たり、令和6年度学術研究助成費（一般研究）を使用したことを付記する。

[引用参考]

Acheson, S.R.

2005 Gwaii Haanas Settlement Archaeology. In D.W. Fedje, and R.W. Mathewes (eds.) *Haida Gwaii: Human History and Environment from the Time of Loon to the time of the Iron People*, pp. 303-336. Vancouver: UBC Press.

Ames, K.M. and, H.D.G. Maschner

- 1999 *Peoples of the Northwest Coast: Their Archaeology and Prehistory*. London: Thames and Hudson.
- Anderson A., J. H. Barrett, and K.V. Boyle (eds.)
2010 *The Global origins and Development of Seafaring*. Cambridge: McDonald Institute for Archaeological Research.
- Arnold, J. E.
1995 Transportation Innovation and Social Complexity among Maritime Hunter-Gatherer Societies. *American Anthropologist* 97(4):733-747.
- Blackman, M.B.
1990 Haida: Traditional Culture. In S. Wayne (ed.) *Handbook of North American Indians Northwest Coast 7*, pp.240-260. Washington D. C.: Smithsonian Institution.
- Colombi, B.J. and J.F. Brooks (eds.)
2012 *Keystone Nations: Indigenous Peoples and Salmon across the North Pacific*. Santa Fe: School for Advanced research press.
- Crowell, A.L.
1997 *Archaeology and the Capitalist World System: A Study from Russian America*. New York and London: Plenum Press.
- Crowell, A.L., A.F. Steffian, and G.L. Pullar (eds.)
2001 *Looking Both Ways: Heritage and Identity of the Alutiiq People*. Fairbanks: University of Alaska.
- Davydov, G.I.
1976 A Selection of G.I. Davydov: An Account of Two Voyages to America. *Arctic Anthropology* 8:1-30.
- Emmons, G.T.
1991 *The Tlingit Indians*. Vancouver: Douglas and McIntyre.
- Fauvelle, M, S. Sasaki, and P. Jordan
2024 Maritime Technologies and Coastal Identities: Seafaring and Social Complexity in Indigenous California and Hokkaido. *Indigenous Studies and Cultural Diversity* Vol.1 (2): 30–52.
- Fisher, R.
1996 The Northwest from the Beginning of Trade with Europeans to the 1880s. In B. G. Trigger and W.E. Washburn (eds.) *The Cambridge History of the Native Peoples of the*

- Americas* Vol. 1 Part 2, pp.117-182. New York: Cambridge University Press.
- Fitzhugh, B.
- 2002 Residential and Logistical Strategies in the Evolution of Complex Hunter-Gatherers on the Kodiak Archipelago. In Fitzhugh, B and J. Habu (eds.) *Beyond Foraging and Collecting: Evolutionary Change in Hunter-Gatherer Settlement Systems*. New York: Kluwer Academic/ Plenum Publishers.
- 2003 *The Evolution of Complex Hunter-Gatherers: Archaeological Evidence from the North Pacific*, pp.257-304. New York: Kluwer Academic and Plenum Publishers.
- Fitzhugh, B. and D. J. Kennett
- 2010 Seafaring Intensity and Island-Mainland Interaction along the Pacific Coast of North America. In A. Anderson, J.H. Barrett, and K.V. Boyle (eds.) *The Global Origins and Development of Seafaring*, pp.69-80. Cambridge: University of Cambridge.
- Fladmark, K. R.
- 1989 The Native Culture History of the Queen Charlotte Islands. In, G.G.E. Scudder and N.T. Gessler (eds.) *The Outer Shores*, pp.199-222. Queen Charlotte City: Queen Charlotte Museum.
- Holling, C.S. and Gunderson, L.H.
- 2002 Resilience and Adaptive Cycles. In L.H. Gunderson, and C.S. Holling (eds.) *Panarchy: Understanding Transformations in Human and Natural System*, pp.25-62. Washington D.C.: Island Press.
- Monks, G.G.
- 1987 Prey as Bait: The Deep Bay Example. *Canadian Journal of Archaeology* 11:119-142.
- Miller, G.A.
- 2010 *Kodiak Kreol: Communities of Empire in Early Russian America*. Ithaca and London: Cornell University Press.
- Prentiss, A.M.
- 2011 Social Histories of Complex Hunter-Gatherers. In Sassman, K.E. and D.H. Holly (eds.) *Hunter-gatherer Archaeology as Historical Process*, pp.17-33. Tucson: The University of Arizona Press.
- Reid, J.L.
- 2015 *The Sea is My Country: The Maritime World of the Makahs*. New Haven and

London: Yale University Press.

Sampson, C.P.

2023 Introduction. In Sampson C.P. (ed.) *Fisher-Hunter-Gatherer Complexity in North America*, pp.1-19. Gainesville: University Press of Florida.

Stearns, M.L.

1990 Haida since 1960. In Wayne, S. (ed.) *Handbook of North American Indians Northwest Coast 7*, pp.261-266. Washington D. C.: Smithsonian Institution.

Stefansson, V.

1913 *My Life with the Eskimo*. New York: The MacMillan Company.

Steffian, A.F. and P.G. Saltonstall

2001 Markers of Identity: Labrets and Social Evolution on Kodiak Archipelago. *Alaska Journal of Anthropology* 1(1): 1-27.

Stewart, H.

1984 *Cedar: Tree of Life of the Northwest Coast Indians*. Vancouver and Toronto: Douglas and McIntyre.

Tezuka, K.

1998 Long-distance Trade Networks and Shipping in the Ezo Region. *Arctic Anthropology* 35(1):350-360.

石川県立歴史博物館・小樽市総合博物館編

2022『アトウイー海と奏でるアイヌ文化』札幌：公益財団法人アイヌ民族文化財団。

大井晴男.

1976「オホーツク文化の船」『北方文化研究』10：1-30。

大塚和義

1995『アイヌー海浜と水辺の民』東京：新宿書房。

大塚和義編著・国立民族学博物館編

2001『ラッコとガラス玉ー北太平洋の先住民交易』大阪：千里文化財団。

岸上伸啓

2015「環北太平洋沿岸地域の先住民文化に関する人類学研究的の歴史と現状ー日本人による文化人類学的研究を中心に」『国立民族学博物館調査報告 132：7-77。

2022「環北太平洋地域の先住民文化に関する比較研究ー大林太良、渡辺仁と国立民族学博物館の研究プロジェクト」北海道立北方民族博物館編『大林太良・学問と北方文化研究ー大林太良先生没後20年記念シンポジウム』(第35回北方民族文化

シンポジウム) pp.41-46, 網走：北方文化振興協会。

小林真人

1988「蝦夷船について」北海道・東北史研究会編『北からの日本史』(函館シンポジウム) pp.260-268, 東京：三省堂。

鈴木信

2003「擦文～アイヌ文化期の準構造船」松藤和人編『考古学に学ぶ』2 (同志社大学考古学シリーズ刊行会) pp.709-720.

瀬川拓郎

2013『アイヌの沈黙交易－奇習をめぐる北東アジアと日本』東京：新典社。

関雄二編

2017『アンデス文明－神殿から読み取る権力の世界』京都：臨川書店。

高瀬克範

2015「カムチャツカ半島南部出土内耳土器とその千島アイヌ史上の意義」『論集忍路子』4：17-45。

2023「千島アイヌの成立と展開」高瀬克範編『北海道考古学の最前線－今世紀における進展』pp.143-145.

チースリク, H. 編

1962『北方探検記－元和年間に於ける外国人の蝦夷報告書』東京：吉川弘文館。

手塚薫

2011『アイヌの民族考古学』東京：同成社。

フィッツヒュー, ベン

2002「北太平洋における海洋狩猟採集民の起源－コディアック島の事例から」『国立民族学博物館調査報告』33：49-82.

山内清男

1964「日本先史時代概説」『日本原始美術1 縄文土器』講談社。

ランドー, A.S.

1985『エゾ地一周ひとり旅－思い出のアイヌ・カントリー』東京：未来社。

渡辺仁

1988「北太平洋沿岸文化圏－狩猟採集民からの視点 I」『国立民族学博物館研究報告』13(2)：297-356。

1992「北洋沿岸文化圏－狩猟採集民文化の共通性とその解釈問題」宮岡伯人編『北の言語－類型と歴史』pp.67-107, 東京：三省堂。